

上田産の生糸で上田紬、夢のプロジェクトスタート裏話

小山田秀士(7組)

平成24年4月から上田商工会議所に常勤の理事として働いております小山田です。商議所で求められたミッションに注力しておりましたところ、「カイコと繭と紬のまち」伝統産業活性化プロジェクトがスタートして2年目でした。

かつて上田は「蚕都」と呼ばれて上田紬、蚕種業や製糸業で栄えていました。この事業は地域の伝統産業である上田紬の技術や技能を活用して、会員である小規模事業者の全国展開を目標とする中小企業庁の補助事業です。事業の中身は、新しい糸の開発、デザインの設計効率化、市場調査、紬や養蚕関係施設の観光や体験ツアーリズムの開拓、原料の繭の確保など5つの内容で、ワーキンググループができていました。

これに関して会議に参加するうちに「上田紬を上田の生糸でつくりたい」と強い希望があることがわかりました。しかしそんな夢みたいな話は難しいし、商や工はわかるが養蚕や蚕など全然わからない、とのことで私が動きました。

私の家もかつて養蚕や機織りもしていたごく普通の一般的な上田地域の農家でしたが、子供の頃はもうやってはいませんでした。しかし養蚕や桑園は日常的な風景でした。いろいろ記憶をたどり、JAや市役所農政や農業改良普及所、農業委員や篤農家など、今までの知り合いや人脈を使って養蚕業を再度やってくれる人をさがしました。が、経験のある方はあんな大変なものはいまさらやりたくないと言うし、経験のない人は過酷な労働や愚痴が刷り込まれていて話には乗ってきませんでした。

信州大学繊維学部の養蚕の教授や専門職員と仕事をしていると、蚕は改良され病気に強く養蚕は昔のような過酷なことはない、とのことです。桑くれは朝と夕に2度だけ、それも切った桑を枝のままあたえる、小さいうちは人工飼料とのこと。ふまじめに飼ってくださいと言うではありませんか。かなり作業は軽減されているようです。

作業が楽になったら、問題は価格だけだろうとのことで紬の組合に契約価格で買い取ってもらう、その価格にするために繭代金に農政からの補助と、生糸価格に商工からの補助を市や県に働き掛け内諾を得て、ざっくりと上田産生糸1^{kg}、15,000円、繭1^{kg}、約3,000円で働きかけました。これは水稻の約4倍ほどで検討の動機になる価格です。

そんな中で、今は手いっぱいだが検討の余地はあるとか定年後にやっても良いなどとの話も出てきました。

しかし、桑園造成は数年先の話で今日明日ほしい紬業者の希望はかなえられません。そんな時、信大の養蚕の教授や専門職員から桑園に余裕があるし養蚕の施設も学生の実習が終われば空いているから使ってもよい、との提案をいただきました。

養蚕作業は平日は9時から10時まで桑を切りあたえる、午後は学生が実習で給桑。土日は朝と夕方に桑を切りあたえる。これなら先生方のご協力で素人でもできる。あとはマンパワーだけ、いかにして集めるか考えました。

たしか皇居で美智子皇后さまは上田起源と言われる小石丸という蚕を飼っておいでになる。この地域には元気なご婦人方がたくさんいるのはわかっていたので、「皇后さまと同じお仕事

をやってみませんか、真綿紡ぎや座繰りも体験し、自分で飼った蚕の純白の繭に感動しませんか」と、公募してみました。がすぐには集まりませんでした。

この一方、これを「^{こがいひめ}蚕飼姫プロジェクト」と名付けました。県歌の信濃の国の3番に、「^{こがい}蚕飼いの^{ひめ}技の打ち開け」とありますし、お願いする元気なご婦人がたをイメージして姫をつけました。

いろいろお願いして3グループ17名ほど集めることができました。新聞(下段に記事転載)に載った4月30日は全員集合して蚕養蚕の勉強、桑園や施設を見て飼育の概要をイメージし、自分の作業日程を確認してするために開催したものです。

今後は5月17日にふ化させて5月30日から「姫」の活躍です。6月19日に繭を収穫する予定で、すぐ製糸工場に持ち込み上田産の生糸が15キロほど出来てきます。上田紬は秋には出来上がるでしょう。

このプロジェクトはあくまでもピンチヒッターで、養蚕農家や養蚕業の育成が本命です。農家は少し光明が見えましたし、このほかにも障害福祉サービス事業所が障害者の仕事として適している。また養蚕の合間に座繰りで糸を紡ぐことも計画して桑園用地の取得に本格的に動き始めています。数年後には今と違った景色が見えることを期待しています。

(平成25年5月8日記)

長 27 地域 2013年(平成25年) 5月1日 水曜日 信濃毎日 新

信州ワイド

上田 地元の生糸で上田紬を

全盛期のように上田で蚕を育て、地元産の生糸で上田紬を作ろう。上田市の上田商工会議所と信州大繊維学部、市内の紬業者でつくる上田紬活性化支援事業実行委員会(鈴木由紀夫委員長)は、地元で蚕を育て、生糸を取る「蚕飼姫プロジェクト」を発足させ、5月中旬、同市常田の同学部施設内で市民が蚕の飼育を始める。年内には地元産の生糸で上田紬を仕立て、「蚕都上田」の復活につながる考え。30日は同学部で、蚕の飼育に協力する市民20人を対象にした説明会があり、16人が参加した。

実行委は、養蚕から糸の製品化まで全ての過程を地元で復活させようとする。計画は、01年9月に発足させた。計画は、

上田市内の蚕種会社からまず6万匹の蚕を仕入れ、同学部の施設で飼育。公募で参加した市民は教員の指導を受けながら、学部内の研究用の畑にある桑約1500本の葉を蚕に与えたり、蚕のふんや食べ残した葉の掃除をしたりする。約15分の生糸を取り、紬業者が上田紬を織る予定だ。

30日は繊維学部棟で同学部の金勝廉介特任教授(65)＝上田市上田＝が、蚕の育て方について説明。「品種改良が進み、病気に強くなっている一方で、昔より飼育は簡単」などと話した。さらに、学部内の桑畑や繭を育てる部屋などを見学。同学部技術専門職員の茅野誠司さん(54)が、幼虫を3週間ほど飼育し、糸を吐かせて繭にするまでの大まかな流れを説明すると、参加者たちは熱心に聞き入った。

参加した斎藤繁子さん(70)＝同市鹿教湯温泉＝は、「以前から養蚕に興味があった。上田の活性化につながればうれしい」と話した。

同商議所によると、上田地域は千曲川沿いの強い風と乾燥した気候のため桑に害虫が付きにくく、桑栽培に適している。江戸時代から養蚕が盛んだった。上田紬も盛んに織られ、昭和30、40年代まで多くの紬業者がいた。上田市内には現在、養蚕農家はなく、絹糸は中国やフランスなどからの輸入に頼っているという。

同商議所の小山田秀士理事(64)は「プロジェクトで上田の養蚕をPRし、将来は地元農家が本格的に養蚕を始め、地元産の上田紬を販売できるようにするきっかけにしたい」と話している。

蚕に繭を作らせる部屋で茅野さん(右)から説明を聞くプロジェクト参加者＝上田市常田の信州大繊維学部

商議所などの実行委 プロジェクト
信大施設で市民と蚕の飼育へ